

# 埼玉県における持田徹について

岩田 恵子

関東聾史研究会

あらまし：埼玉県ろう者協会の初代理事長だった持田徹について、「家庭を顧みず、ろう者のために尽くした人」「財産をなげうってまで奉仕した人」との話をよく聞いていたが、残されていた資料、インタビューにより、改めて彼の人物が明らかになってきた。

## 1. はじめに

持田徹は、群馬・東京の聾学校卒業後、ろうあ運動に一生を捧げたが、早くも53歳で亡くなったこともあり、彼の功績についてはあまり知られていない。残されていた資料によると、ろう者のために自らを捧げたことがわかるが、なぜ、知られていなかったのかを含めて、多くのろう者に持田徹の生き方を知ってもらいたいという気持ちが強くなってきたのが、研究の動機である。

## 2. 持田徹の生い立ち

大正2年（1913年）2月埼玉県本庄市の裕福な家庭に生まれたが、小さい時から耳が聞こえず、心配した両親が絵を描かせたのがきっかけになり、絵が好きになったという話がある。10歳の時に私立高崎聾啞学校の第2回生として入学後、群馬県立盲啞学校の第1回生として卒業している。その後、もっと絵を学びたいという徹の気持ちを両親が理解をして、東京聾啞学校の西洋画科に進み、昭和8年（1933年）卒業している。その後、画

家の傍ら、ろうあ運動に入り込んでいった。当時の画家の仲間も一緒に活動していたことから、当時は、『集まれ、一緒に活動しよう』という雰囲気であったことが想像できる。

## 3. 埼玉県ろう者協会での活動

昭和27年（1952年）4月埼玉ローア協会と児玉郡ローア福祉協会が合併し、埼玉県ろう者協会を設立した時に初代理事長として就任後、初代野球部部長、初代野球部監督としても活動した。資金を作るため会社に働きかけ広告を集めたり、中学校のグラウンドを無料で借りるなど奮闘した記録も残されている。持田氏と関わりのあった方のインタビューによると「大会の時に下駄でやってきたプラカード持ちの子どもたちに、運動靴をすぐ購入するなどの行動力もあった」という。

昭和26年（1951年）1月ろう者の更生のために自宅を提供して作ったのが「ローア者更生の家」である。昭和26年（1951年）9月12日の朝日新聞では「1月ろう者ばかりの授産所“更生の家”を作って7名の所員と共に4台のミシン

をたよりにわずかな収入で新しい生活を歩んできた。ところが、新聞を見たミシン会社から3台のミシンが寄贈され、7台に増えたミシンで注文も殺到、ようやく黒字経営にまでこぎつけた」と書かれている。

昭和29年(1954年)から35年(1960年)まで、聾啞者の福祉促進を図るために啓蒙運動の事業として全国初の巡回映画会を開催した。(述べ35回)記録によると、「風紋」産経文化映画ニュースを川口市市民中央公民館・熊谷市富士見中学校体育館等で映画会を開催していたことがわかる。

定期総会資料の中にある事業報告の項目の中にも「会員の就職交渉、入社決定」「会員の縁談交渉、福島県へ出張交渉結果結婚する由」「会員の年金申請の件役場へ出張、身障指定医院へ出張、解決」「会員の件で役場、助産所へ出張」と記載されている。

原文では個人名も載せてあり、当時は聾啞協会で、会員のためにいろいろと働いていたことがわかる。

#### 4. 関東ろうあ連盟での活動について

ろうあ会館がない時代だったこともあり、当時の全日本聾啞連盟の藤本連盟長が来泊したり、関東ろうあ関係の会議では、持田宅に集合したことも度々あったと懐かしく語る活動仲間が沢山いたのである。当時、「陸聾者映画演劇研究会」が盛んに活動していた。ロケ地にと持田家を提供したほどであるが、懐かしい映画の中では今は亡き持田氏の書をたしなむ姿や大きな家の和室も窺(うかが)い

見ることができる。

※昭和24年(1949年) 会計部  
昭和25年(1950年) 副委員長  
昭和29年(1954年)～  
31年(1956年) 理事  
昭和34年(1959年) 理事長  
昭和35年(1960年)～  
36年(1961年) 理事

#### 5. 全日本聾啞連盟での活動

どういう経緯で理事になったのはわからないが、日聴紙の紹介記事によると「彼ほどのろうあ運動に身を徹している者は、全国ろうあ界中をみわたしてもおらないただろう。関東地区にあってはたいへん古い方でろうあ運動がめしより好きなくらいで連日方々へ駆けまわっている。(略)」と書かれている。

※昭和32年(1957年) 全日本聾啞連盟の理事(体育部次長)として就任する。

#### 6. 選挙の応援手話弁士としての活動

昭和34年(1959年)4月熊谷市議員候補者矢野泰助氏の応援弁士として初めて選挙カーに乗り、手話で通訳したという有名なエピソードもある。そのおかげで、ろう者が投票へ出向くようになったとの逸話もある。その結果、矢野氏は最高得票で当選した。

昭和37年(1962年)4月熊谷市長候補者黒田海之助氏の応援弁士として手話法を使う(当選)

後で聞く話によると、川口市内にある会社でも候補者の演説をろう者社員に向

けて手話で通訳していたのを見たらろう者がいたことから、ろう者のための通訳をしていたことがわかる。

昭和42年（1967年）1月東京都中野区で総選挙の立会演説会に全国初の手話通訳が付いたが、持田氏は8年早く実行したことになる。

## 7. ろう通訳者としての活動

当時、手話通訳派遣制度もなく、手話通訳といえば、聾学校の先生かろう者の家族が行っていた。そんな中で、協会会員の就職交渉、縁談交渉、行政交渉、子どもの入学交渉、警察署での通訳を行っていた。

娘さんの話によると、警察署からの電話で出かけることも多かったため、警察署では聾学校の先生より通じていると思われていたことがわかる。警察署での通訳の功績も大きく、警察署からは感謝状を贈呈された。

## 8. 画家としての活動

絵画としても、昭和15年（1940年）、独立美術展に入選した「赤城山」は本庄市役所に寄贈された。その後、県展では招待画家になるほどの実力を見せたが、多くの作品は、ろうあ運動の陰に隠れ、そのほとんどが発表されず、知人や気に入ってくれた方に進呈したものも多いという。作品は、赤城山、妙義山など本庄から望む自然を題材にしたものが多く、「安定した造形に崇高な精神がうかがわれ、それだけの画家は県内にそうはいない」と絶賛されるほどであった。麗原会

の会員として画集に載っている。

金鑽神社を描いた絵は金鑽神社に寄贈されて、今でも飾られている。娘さんの話では、「絵の才能を生かしてほしい」と話した時、さびしそうな顔をしていたとのことである。周りの人から、「家庭を犠牲にしてまでろう者のためにやるのか」と随分言われたが、「今にわかる」と言って、自分の信念を曲げなかったそうである。



## 9. 最期について

昭和41年（1966年）1月大宮駅のホームにて脳軟化症で倒れて亡くなる。

告別式では、県知事栗原浩氏からの弔辞が読まれ、持田氏の人柄が偲ばれる。弔辞の概要は下記の通りである。

「本日ここに故持田徹氏の告別式にあたり謹んで氏の御霊に弔辞を捧げます。貴殿は不幸にしてろうあ者の身としてこの世に生をうけたのでありますが、勉勵辛苦を重ね、常人にも及ばない叡智（えいち）をもって、幾多の絵画の傑作を発表し、世人に貴殿の天才を示したことは周知のことです。しかし、それに

もまして、私たちの胸裡に強く刻まれていることは貴殿が自ら深く味わった悲しみを胸に秘めて県下のろうあ者の福祉のために立ち上がり雨にもめげず風にもくじけず自ら瘦身(そうしん)を駆使(くし)して東奔西走をした姿であります。(略)他に弔辞を読まれた方がいたかどうかはわからない。

## 10. まとめ

埼玉県ろう者協会の初代理事長であった持田徹の生涯を調べていくにつれ、残されていた8ミリフィルム、インタビューでの話からも、持田氏は温和でおおらかな性格で、何よりも人のことを考えていたことがわかった。定期総会の資料にも直筆の記録が残されており、勤勉な人徳者であったことが伺える。

また、何もなかった時代、信念を持ってろうあ運動に自らを捧げた人生から、学ぶことが多い。

## 11. 参考文献

- (1) 持田徹生誕100年記念企画 持田徹  
平成25年(2013年)3月3日  
熊谷市ろう者協会・熊谷手話サークル創立  
30周年記念大会実行委員会
- (2) 関東ろう運動60年のあゆみ  
平成21年(2009年)3月18日  
関東ろうあ連盟
- (3) 朝日新聞 昭和28年(1953年)9月12日
- (4) 昭和34年度埼玉県ろうあ協会事業経過状況  
昭和35年(1960年)4月3日  
埼玉県ろうあ協会
- (5) 昭和35年度埼玉県ろうあ協会事業経過状況  
(中間)昭和36年(1961年)4月2日  
埼玉県ろうあ協会
- (6) 昭和37年度埼玉県ろうあ協会事業経過報告  
昭和38年(1963年)4月7日  
埼玉県ろうあ協会
- (7) 日本聴力障害者新聞 昭和32年(1957年)  
8月15日
- (8) 弔辞(埼玉県知事栗原浩)昭和41年(1996年)  
1月21日